

## 博士(文学)学位請求論文審査報告要旨

論文提出者氏名	真鍋 智裕
論文題目	アドヴァイタ・ヴェーダーンタ学派における自己顕照論の展開
<p>審査要旨</p> <p>本論文は、12 世紀に活動したアドヴァイタ・ヴェーダーンタ学派の学匠シュリーハルシャの著書 <i>Khaṇḍanakhaṇḍakhādyā</i> (Kh) における識 (vijñāna) の自己顕照 (svapraśā) 論証の解析を中心にして、アドヴァイタ学派の自己顕照論証の思想的展開の一端を明らかにするものである。</p> <p>本論文第一部第一章では、まず問題の所在を明らかにする。Kh の自己顕照論証は、瑜伽行派の説という体裁を採っているが、瑜伽行派の文献には同様の論証は見られない。また、この自己顕照論証は、他のアドヴァイタ学派の文献にはあまり見られない形式を採っている。そのため、Kh の自己顕照論証は独自のものなのか、アドヴァイタ学派の伝統教説によるものなのか、ということが問題となる。そこで、まず Kh の自己顕照論証を解説分析し、次に Kh より以前・以後のアドヴァイタ学派の自己顕照論証を考察するという過程を通して、アドヴァイタ学派の自己顕照論証の思想的展開を明らかにする、という本論文での基本的研究方法を示し、加えて、アドヴァイタ学派の自己顕照論証に関する先行研究を概観している。</p> <p>第二章では、シュリーハルシャの生涯、年代、著作に関して、先行研究に基づき論じている。それによると、彼の現存著作は 2 作しかないが、少なくとも 10 の著作を著したと考えられる。</p> <p>第三章では、Kh における当該の自己顕照論証を分析している。その結果、Kh の識の自己顕照論証は、「識に対して、それが正しく知られることを妨害する要因が存在しないことから、その識が正しく知られること、即ち自己顕照であることを論証するもの」であることを論理的に整備した形で明らかにした。更にそれは、アドヴァイタ学派の姉妹学派であるミーマーンサー学派の自律的真理論 (svataḥprāmāṇyavāda) を援用したものであることも指摘した。第四章では、第三章で扱った論証を解説困難にしている「否定の正知」(vyatirekapramā) という概念を取り上げている。パラレルな議論が見られる 13 世紀に活躍したチツカの <i>Tattvapradīpikā</i> (TP) での記述をも併せて考察した結果、その概念が「知(識)が存在しないことを正しく知る知」(abhāvapramā) であることを明らかにした。これらは本論文の成果の一つである。</p> <p>第五章では、Kh における自己顕照論証と同様の論証が見られる、11 世紀頃活躍したアーナンダボーダの <i>Nyāyamakaranda</i> (NMa) と TP における識の自己顕照論証を分析し、その結果、NMa から Kh を通して TP に至る自己顕照論証の思想的展開があることを文献的に実証した。そのため、Kh の識の自己顕照論証は、彼独自のものではなく、アドヴァイタ学派の伝統説と見なされることを指摘した。また第六章において、8 世紀に活躍したアドヴァイタ学派の開祖シャンカラの著作 <i>Brahmasūtrabhāṣya</i> と <i>Bhagavadgītābhāṣya</i> には、自律的真理論の影響を受けた議論があることを見出し、その議論を解説分析した結果、シャンカラの議論は Kh の自己顕照論証の淵源となった可能性があることを指摘した。</p> <p>第七章においては、9-10 世紀に活躍したヴァーチャस्पティ・ミシュラの <i>Bhāmātī</i> (Bhā) に見られるアートマンの自己顕照論証に NMa, Kh, TP と同様な論証が存在することを明示した。その際、当該の論証中に登場する「偶来的なものでないこと」と「常住な認識であること」と「自己顕照であること」という概念の相互の関係が不明瞭であったため、この点に関して考察を加えた。その結果、これらの三概念が交換可能な概念であることを明らかにした。更に第八章において Bhā と Kh の議論を比較することによって、Kh が Bhā の議論を受け継いでいることを明らかにし、Bhā が NMa, Kh, TP の自己顕照論証の原型となったことを指摘した。また Bhā ではアートマンの自己顕照論証が為されていたが、Kh においては識の自己顕照論証に変化している。そのことによって、自己顕照論証自体もそれに応じて変化していることを指摘した。</p> <p>本論文において扱われているほとんどの文献箇所に対する邦訳は未だなされていない。本論文の第二部では、考察に使用した文献の校訂テキスト(一部は写本も使用)と邦訳も掲載している。ただし、本論</p>	

文で考察したのは各文献における自己顕照論の一部であること、また、Kh に至るまでの全てのアドヴァイタ学派の文献に対して考察を加えているわけではないこと、この二点はこれからの課題として残されている。

本論文での以上の考察によって、Kh における自己顕照論証は、シャンカラに淵源を持ち、少なくともヴァーチャスパティに遡り、チツカへと至るものである、という思想史の流れが文献的な精査に基づいて解明されている。これはこれまでの研究では見出されなかった新たな成果である。以上により、本論文は博士学位を授与するにふさわしい論文であると判断した。

氏名 \_\_\_\_\_

--

公開審査会開催日	2014年 11月 28日			
審査委員資格	所属機関名称・資格	博士学位名称	専門分野	氏名
主任審査委員	早稲田大学文学学術院教授	Dr. phil. (ハンブルク大学)	印度哲学(含仏教学)	岩田 孝
審査委員	早稲田大学文学学術院教授	博士(文学)(早稲田大学)	仏教学	大久保 良峻
審査委員	東洋大学文学部東洋思想文化学 科教授	Ph. D ( Banaras Hindu University)	印度哲学(含仏教学)	宮本 久義
審査委員				
審査委員				